あなたの街の演奏会（コンサート）

TOYOTA COMMUNITY CONCERT

第1473回

Viva Italia
イタリア音楽紀行

TAKAMATSU SYMPHONY ORCHESTRA Since 1951

高松交響楽団
第112回定期演奏会

2014 6.15 日 ――― 開演14:00

香川県県民ホール［アルファあなぶきホール］大ホール

主催／高松交響楽団（TSO）　協賛／香川県トヨタ販売会社グループ・トヨタ自動車株式会社　協力／公益社団法人日本アマチュアオーケストラ連盟

トヨタ自動車とトヨタ販売会社グループは、アマチュアオーケストラ活動を応援しています。

トヨタコミュニティコンサートの情報はインターネットでより詳しくご覧いただけます。www.toyota.co.jp/tcc/

ネッツトヨタ高松株式会社
代表取締役会長
木村大三郎

本日はトヨタコミュニティコンサートにご来場いただきありがとうございます。

トヨタコミュニティコンサートは“音楽を通じて地域文化の振興に貢献すること”を目的にトヨタ販売会社グループとトヨタ自動車が全国で活動するアマチュアオーケストラの公演を支援し開催するもので、1981年以来、今回で1473回目を迎えることになりました。

私は高松交響楽団後援会「高響倶楽部」会員で毎回高松交響楽団の演奏会を楽しみにしていますが、今回、こうしてトヨタ販売会社グループとして６０余年の歴史を持つ高松交響楽団と関われることに大きな喜びを感じています。

たくさんの方たちにもっと気軽に音楽とふれあっていただきたい、オーケストラの生の演奏をきいていただきたい、そんな願いを込めて喜びと感動がお届けできたらと思っています。

最後になりますが、今後のトヨタコミュニティコンサート活動が、地域の文化力向上の一助となることを祈念するとともに、開催にあたりご支援を賜りました皆様に厚くお礼申し上げ、ご挨拶といたします。

高松交響楽団　会長
大西　　晏

高松交響楽団が故・緒方益國氏の主宰のもと昭和26年（1951年）に香川県内で初めての本格的な交響楽団として発足して以来、今年で63年目を迎えました。今となっては発足当時のオーケストラの響きがどんなものであったのか知るよしもありませんが、先年、当時のメンバーの方から、今の高響は「たとえようもないほど、良くなった」と過分の賞賛の言葉を頂きました。遅々とした歩みではございましたが、偏に各方面から多くの方々の厚いご支援のたまものと、誠に有難く心から感謝をいたしております。

第112回定期演奏会は、各国名曲シリーズとして、音楽の国イタリアの色彩感たっぷりの作品を選びました。また、今回は2009年、2012年についで３回目のトヨタコミュニティーコンサートとしても選ばれ、特に華やかに活躍する管楽器群は、吹奏楽ファンの皆様にもお楽しみ頂けるものと存じます。

中国の「論語」という本の中に「子､斉にありて韶を聞く。三月肉の味を知らず。曰く、図らざりき、楽の為すことの斯に至らんとは」という言葉があります。韶という音楽を聴いた孔子が、「三月も肉が食べられないほど感動した。これほど音楽というものが素晴らしいものとは」といったというのであります。今日のわたくしどもの演奏が、皆様にとって正にそれであれば幸いでございます。今後とも一層のご鞭撻を賜りますようお願い申し上げてごあいさつといたします。

交響曲第４番 イ長調「イタリア」（F.メンデルスゾーン）

F. メンデルスゾーン
（1809 − 1847）

交響曲第４番「イタリア」は、ドイツ・ロマン派の天才作曲家メンデルスゾーンが残した５つの交響曲のうち、第３番「スコットランド」と並んでよく知られている曲です。この曲は「イタリア」と副題が示すように、イタリアの風物から受けた印象をもとにして作られた曲と言われています。明らかにイタリアの素材を用いたのはローマの舞曲、サルタレロが用いられている第４楽章のみですが、全曲を貫く突き抜けるような明るさ･躍動感は、いかにもイタリアといった風情です。メンデルスゾーンは 1830 年にイタリアに旅行し、その間にローマでは謝肉祭や教皇の即位式などを見ています。この交響曲はそんなローマへの滞在中に書き始められ、帰国後の 1833 年に完成し、自らの指揮で初演されます。その時、メンデルスゾーンは 24 歳だったといいますから、その早熟ぶりには驚かされます。

第１楽章　Allegro vivace　イ長調　6/8拍子　ソナタ形式

はじける様な弦のピッチカート、木管楽器の軽快な刻みにのって、ヴァイオリンの生き生きとした第１主題で始まります。一度聴くと忘れられない印象を残しますが、これこそが、メンデルスゾーンにとってのイタリアの第一印象だったのでしょう。第２主題は、明るい雰囲気を保ちつつもやや落ち着いた風合いのもので、激しく主張してくるのではなく回りに溶け合っています。続く展開部では、第３主題とでもいうべき新たな短調のテーマが出てきて、それがフーガの様に濃密に展開されていき、それと第１主題の断片が、ぶつかり合う様にやりとりを繰り広げます。その頂点で、勝ち誇ったようにトランペットが第１主題のリズムを演奏し、軽やかで流麗なコーダを経て楽章を閉じます。沸き立つような躍動感が心地よい楽章です。

第２楽章　Andante con moto　ニ短調　4/4拍子　自由な三部形式。

哀愁に満ちた簡素な前奏に続いて、ヴィオラと木管楽器によって巡礼の歩みを思わせる、詩情あふれるメロディが出てきます。それをヴァイオリンが模倣し、やりとりが続きます。中間部では長調になり、クラリネットなどを中心に温かい光が差すような穏やかなメロディを演奏します。やがて冒頭にもどりますが、巡礼の歩みは遠ざかり、いなくなってしまいます。

第３楽章　Con moto moderato　イ長調　3/4拍子　三部形式

交響曲の第３楽章といえば、古くは宮廷舞曲の「メヌエット」が置かれ、ベートーヴェンの時代以降はその代わりに「スケルツォ」を置く様になっていったのですが、メンデルスゾーンは、時代に逆行するかのように、この楽章にメヌエットを採用しました。単に時代を逆行しただけで無く、ロマン派音楽ならではの美しく優雅なメヌエットです。中間部では特徴のあるリズムがホルンで演奏され、楽章の最後に再度このホルンがエコーのように登場し静かに閉じます。

第４楽章　Saltarello：Presto　イ短調　4/4拍子　自由なロンド形式

メンデルスゾーンは、この楽章をローマの謝肉祭に町をあげて踊る人々の姿に着想したものと思われます。サルタレロ（Saltarello）のリズムで２つの主題が出されます。サルタレロというのは速いホップ・ステップで踊られるローマ地方のダンスで、途中でナポリのタランテラの舞踏も現れます。曲は終始熱狂的に進みます。一説によると「タランテラ」の語源は、毒グモ「タランチュラ」で、タランチュラに噛まれても、この踊りを踊れば毒が消えるという言い伝えによるのだとか。要するに「命のかかった踊り」ですから、熱狂的なのは当然といえば当然でしょう。また、交響曲のフィナーレにありがちなしつこさが無く、さっぱりと全曲を終えてしまうのもこの楽章の大きな特徴です。

イタリア奇想曲　(P.I.チャイコフスキー)

P.I. チャイコフスキー
(1840 − 1893)

チャイコフスキーは、自らの教え子と1877年に結婚するも、わずか3ヶ月で破綻するという不幸を経験しました。彼は、自らの心を癒すべくイタリアへ旅に出たのですが、そこの風土・文化・芸術は、彼に大きな癒しと霊感をもたらし、早速、滞在先のローマで作曲の構想を練り始めました。ロシアへの帰国後もこの作品に取り組み、1880年に完成し、初演は大好評を持って迎えられました。曲は大きく分けて5部からなり、続けて演奏されます。

第1部　トランペットのファンファーレ（使っている音は「ド・ミ・ソ」だけ）によって開始されます。これは作曲者の宿泊先に隣接する騎兵隊の宿舎より聞こえた信号ラッパからヒントを得たものです。この後、表情は急に暗くなります。これは沈んだ気持ちの作曲者自身の姿かも知れません。その後、オーボエやコルネットの二重奏で、伸びやかなメロディがでてきますが、これはイタリア民謡からの引用です。**第2部**　全弦楽器が「跳ねる」様なリズムを出し始めます（楽譜には弓を弦の上で「跳ねる」ように指示があります）。そのリズムに乗って、スピード感のあるエネルギッシュなテーマを奏で、ウキウキとした気分になりますが、次第に勢いが無くなり、気が付いたら、陰鬱な雰囲気に戻ってしまいます。**第3部**　それを振り切るように、強引にスピードを速めます。前曲でもでてきた「タランテラ」という様式の舞曲です。タンバリンをはじめ打楽器が賑やかに鳴り響きます。**第4部**　次に続くのは、豪快で盛大な大合奏です。演奏されるのは第1部でも出てきた二重奏のメロディです。**第5部**　再び、タランテラ舞曲が出てきてその頂点で後奏に入り、疾走感と共にすがすがしく曲を結びます。

交響詩「ローマの祭り」　(O.レスピーギ)

O. レスピーギ
(1879 − 1936)

近代管弦楽法の名手リムスキー・コルサコフに師事し、地元イタリアの音楽院の教授として古楽の研究にも取り組んだレスピーギの作風は、新しさと古さが同居しており、「ローマ三部作（ローマの噴水・ローマの松・ローマの祭り）」は、そんな彼の特色の良く出た代表作です。その三部作の中で最後に作曲されたのが、本日演奏する「ローマの祭り」です。ところで一般的に「祭り」というと、日本でもそうであるように仏事・神事と関連づいていることが多いのですが、ローマの場合、言うまでも無く、祭りはキリスト教と関連があります。この曲は、祭りと合わせて「キリスト教の歴史」を描いた一大音楽絵巻とみる事もできるでしょう。各楽章には作曲者自身が作った表題がありますので、解説と合わせてご覧ください。

第1曲「チルチェンセス」

チルコ・マッシモ（競技場）の上に威嚇するように空がかかっている。しかし今日は民衆の休日、「アヴェ・ネローネ（ネロ皇帝万歳）」だ。鉄の扉が開かれ、聖歌の歌唱と野獣の咆哮が大気に漂う。群集は激昂している。乱れずに、殉教者たちの歌が広がり、制し、そして騒ぎの中に消えてゆく。

時代は、暴君としてその名を残す「皇帝ネロ」の頃。「チルチェンセス」とは、ネロがキリスト教徒を迫害し、公衆の面前で、彼らを猛獣と戦わせた、事実上の公開処刑のことです。死を目の前にしても誇り高く歌う殉教者（弦楽器の斉奏）に、猛獣（金管楽器の乱奏）が襲いかかります。古来のローマの祭りは、あまりにも残忍なものだったのです。

第2曲「五十年祭」

巡礼者達が祈りながら、街道沿いにゆっくりやってくる。ついに、モンテ・マリオの頂上から渇望する目と切望する魂にとって永遠の都ローマが現れる。歓喜の讃歌が突然起こり、教会はそれに答えて鐘を鳴り響かせる。

西暦1300年以降50年おき(現在では25年おき)に行われている巡礼祭です。巡礼者の疲れた足取りの様に始まります。しかし、ローマに近づくにつれ、足取りは浮き立つ様に早くなります。丘の頂上でローマを一望した時の巡礼者たちの歓喜の描写は見事としか言いようがありません。ホルンの楽しそうな旋律が現れ、次の曲へ続きます。

第3曲「十月祭」

カステリ・ロマーニでの十月祭は、葡萄で覆われ、狩りの響き、鐘の音、愛の歌にあふれている。その内に柔らかい夕日の中にロマンティックなセレナードが起ってくる。

時代はさらに新しくなり、葡萄の収穫を祝う収穫祭の様子が描かれています。カステリ・ロマーニは、ローマ近郊の、ワインの産地として有名な所で、ローマ教皇の別荘もある、由緒正しき名所でもあります。

第4曲「主顕祭」

ナヴォナ広場での主顕祭前夜。特徴あるトランペットのリズムが狂乱の喧騒を支配する。増加してくる騒音の上に、次から次へと田舎風の動機、サルタレロのカデンツァ、小屋の手回しオルガンの節、物売りの呼び声、酩酊した人達の耳障りな歌声や「ローマ人だ、通りを行こう！」と親しみのある感情で表現している活気のある歌などが流れている。

終曲で、時代は現代に移ります。「主顕祭」というと、日本でいうところの「クリスマス・イヴ」のようなものと考えていただければ良いと思います。要は、「堅苦しい祭事」ではなく「楽しいお祭り」です！　出店や見せ物小屋、音楽等の喧騒の様子が次々に描写されて行き、ローマ三部作の最後を飾るに相応しい猛烈な盛り上がりを見せます。

Profile

指　揮　大勝　秀也　*Shuya Okatsu*

東京に生まれる。東京音楽大学卒業。88年ドイツに渡り、91年ゲルゼンキルヒェン市立歌劇場第一指揮者、94／95シーズンよりボン市立歌劇場第一指揮者。96年マルメ歌劇場音楽監督に就任。99年同歌劇場管弦楽団とCDをリリースし、スペイン旅行を行なった。他に、ボン・ベートーヴェン・ハレ管、北西ドイツ・フィル、ザグレブ・フィル等と国内では、N響、新日フィル等と協演、また、オペラでは二期会「フィガロの結婚」、日生劇場「羅生門」、関西二期会「ルチア」「ばらの騎士」「タンホイザー」等を指揮、正統ドイツの薫り豊かな演奏と高く評価されている。現在、昭和音楽大学非常勤講師。ザ・カレッジ・オペラハウス管弦楽団正指揮者。'09年サンポートホール高松開館5周年記念「カルミナ・ブラーナ」（管弦楽：高松交響楽団）を指揮、公演を成功に導いた。

コンサートマスター　福崎至佐子　*Hisako Fukuzaki*

東京芸術大学音楽学部器楽科卒業。ヴァイオリンを故 神崎初美、故 巌本眞理、故 岩崎洋三、ボヤン・レチェフ、徳永二男に、室内楽を故 ルイ・グレーラーの各氏に師事。日本フィルハーモニー交響楽団を経て1972年、新日本フィルハーモニー交響楽団アシスタントコンサートマスターに就任。コンサートマスターのルイ・グレーラー氏と弦楽四重奏を組みＴＶ、ＦＭ東京、ＣＭ、映画音楽、レコーディングに活躍する。1985年、高松に帰郷し、ゴールドブレンドコンサート、四国二期会オペラ、四国学院大学メサイア演奏会などでコンサートマスターをつとめる。現在、高松大学発達科学部教授。香川大学教育学部講師。かがわジュニア・ニューフィルハーモニック・オーケストラ音楽監督。高松交響楽団常任コンサートマスター。新日本フィルハーモニー交響楽団団友。日本演奏連盟会員。日本クラシック音楽コンクール・全四国音楽コンクール・山陽学生音楽コンクール等審査員。平成13年度「香川県教育文化功労者表彰」、第42回「四国新聞文化賞」、平成16年度「香川県文化功労者表彰」受賞、第67回「山陽新聞賞（文化功労）」受賞。平成21年度地域文化功労者文部科学大臣賞受賞。第20回（2011年）第23回（2014年）日本クラシック音楽協会優秀指導者賞受賞。

管弦楽　高松交響楽団　*Takamatsu Symphony Orchestra*

1951(昭和26)年8月、故 緒方益圜氏が県内の有志を募って創立。同年11月香川県公会堂において第1回定期演奏会を開催し、高松に初めてオーケストラの灯を燈す。爾来、半世紀以上に亘る活動を続け、2011年に創立60周年を迎えた。これまで100回を超える定期演奏会をはじめ、県内外での特別演奏会、青少年を対象にした音楽教室の実施、香川県県民ホール開館20周年記念オペラ「蝶々夫人」全幕公演（2008年）、サンポートホール高松開館5周年記念「カルミナ・ブラーナ（バレエ付き）」公演（2009年）をはじめ、オペラ・バレエ等の他団体や地元音楽家との共演など地域に深く根ざした幅広い活動を積み重ねている。2001年に迎えた創立50周年を機に新たな半世紀に向けた取り組みとして、高響団員を中心に新たに編成された「コレギウム・ムジクム高松」、「高松オペラシティ・オーケストラ」などの多面的なオーケストラ活動を展開している。さらには2001年より香川県の主催事業となった「かがわジュニア・ニューフィルハーモニック・オーケストラ（KJO)」、2003年1月に設立された「丸亀シティフィルハーモニックオーケストラ（MCO)」への演奏・運営面での全面協力など、地域音楽文化の核ともいえる重要な役割を担う香川のマスター・オーケストラとして様々な取り組みを行っている。1987年、地方文化の発展に大きく貢献した功績から音楽団体として四国で初めての「地域文化功労者表彰」を文部大臣より受賞。2008年、香川県より栄えある第1回「文化芸術選奨」を受賞。現在、オーケストラの団員数は、約150名。

TOYOTA

**香川県トヨタ販売会社グループは、
アマチュアオーケストラ活動を応援しています。**

香川県トヨタ販売会社グループ

香川トヨタ自動車　香川トヨペット　トヨタカローラ香川　ネッツトヨタ香川　ネッツトヨタ高松

トヨタ自動車株式会社

トヨタコミュニティコンサートの情報はインターネットでより詳しくご覧いただけます。
www.toyota.co.jp/tcc/

未来を考えた環境に優しいクルマづくりを目指して。